



乾燥した水草と木で造られたカンボジア・ニェカリエチ村の校舎で、建て替えの計画を聞いて笑顔を見せる子供たち。学校で勉強できるのがうれしいという（6月25日、同村で）

熱帯の高い空の下、マホガニーの木の間に小さなトタン屋根をのせた木製の碑が立っていた。赤土の大地が広がるカンボジア北西部のニェカリエチ村。20年前、国連平和維持活動（PKO）中に文民警察官殺傷事件でこの場所での命を落とした高田晴行さん（当時33歳）の慰霊碑だ。

6月末、そこから20日ほどの場所にある学校を訪ねた。活動の合間に現地の子供たちに野球や相撲を教えた高田さんを記念して2001年ごろに作られ、かつては高田さんの名をとって「ハル学校」と呼ばれていた。

48人の子供たちの表情はこの国の太陽のように明るい。しかし目を転じると、木の骨組みを乾燥させた水草で覆っただけの校舎は屋根も壁も穴だらけ。雨が降ると、雨漏りと浸水で授業は中止になってしまう。

老朽化した校舎をレンガ造りに建て替えようという計画が、高田さんの母・幸子さん（80）と姉の国府和子さん（58）らの手で進められている。幸子さんは2年前に初めてニェカリエチ村を訪ね、ポロポロの校舎に心を痛めていた。「カンボジアの復興と平和に命を懸けた晴行の志を引き継ぎたい」との思いから、高田さんの没後20年にあたる今年5月4日、建て替えのための基金を設立。母校の岡山県立倉敷南高の同級生やNPO法人の協力もあって、2か月で目標の3分の2にあたる600万円近くの募金があった。

子供たちは新しい学校を心待ちにしている。貧しくて学校に行けず、17歳で小学校の勉強をするタンソ・ポンさんは「雨の心配をせずに勉強できるようになるんですね。日本語を勉強して、いつか日本へ。」



PKOの水色のベレー帽をかぶった高田さんの写真を見る幸子さん（右）と和子さん。自ら志願し、心配する家族に「男が一度決めたことはやりとげるもの」と言って現地へ赴いた（6月15日、岡山県倉敷市で）

写真と文 菊政哲也

ハルの遺志 つなげたい



毎週月曜日掲載

*レイアウト 野村幸江



文民警察官殺傷事件 1993年5月4日、カンボジアでのPKO活動で選挙監視員を警護し、タイ国境付近の村に向かっていた日本人文民警察官5人らの乗った車列を武装集団がロケット砲などで襲撃。高田晴行警部補（当時）が死亡し、他の警察官4人も重軽傷を負った。



きちんと座って新校舎の説明に聞き入る。現在の校舎（後ろ）には入りきれず、午前と午後に分けて勉強している（6月25日、同村で）



学校近くの高田晴行さん最期の地。慰霊碑は住民らによって大切に守られていた。高田さんは、政府派遣のPKO要員として最初の犠牲者だった（6月25日、同村で）